

平成 28 年度 奈良 ASP ネットワーク  
第 5 回 ESD 子どもキャンプ  
報 告 書



平成 29 年 3 月

国立大学法人奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の  
養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

## 野外活動を見直す

ほとんどのみなさんは、小学校・中学校・高等学校で野外活動を経験し、楽しい思い出として覚えているのではないのでしょうか。児童生徒の立場からは、「楽しかった」行事で十分かもしれませんが、教員側では例年通りの学校行事として、単に「こなす」だけでは問題です。

ここでは、野外活動に関する問題を3つ挙げたいと思います。一つ目が環境教育としての野外活動について、二つ目が野外活動の指導運営スキル、三つ目が教員の苦手意識に関してです。

一つ目として、野外活動を環境教育の側面から見てみます。開発教育や環境教育、E S Dの研究者である田中晴彦氏(2003年)によると、日本の環境教育は、まず公害教育から始まり、自然保護教育、自然体験学習、持続可能な開発のための教育という4つの流れで進展してきました。野外活動は、1980年代後半から登場した自然体験学習の一つでしょう。1970年代に小・中・高等学校生であった私たちの世代では、林間学校(高野山での宿坊体験)・臨海学校(海での遠泳)はありましたが、野外活動はありませんでした。前述した田中氏は、自然体験学習は学校の中で制度化されるに従って、「自然親交型」のプログラムに収斂し、自然体験そのものが自己目的化してしまい、教育内容が「脱環境問題化」してしまう傾向があったと、指摘しています。実際のところ、現在学校で行われている野外活動の多くは、追跡オリエンテーリング等の自然親交型プログラムの実施に終わってしまっているのではないのでしょうか(追跡オリエンテーリングも面白いのですが)。

二つ目に野外活動の指導運営スキルについてです。現在、学校現場では若手教員が増えていることと、少子化に伴い学校規模が小さくなってしまっていることから、野外活動の指導運営に関するスキルをベテラン教員から若手教員に上手く伝えることが困難になっています。1学年複数クラスであれば、ベテラン教員の指導法を見て学ぶことができましたが、1学年1クラスの規模になると、それができません。

三つ目は苦手意識についてです。野外活動には教科書がありません。また、数年に一度担当するということがほとんどのため、指導方法がなかなか身につけません。特に、児童生徒が期待するキャンプファイアーをどのように盛り上げ、心に残るイベントにするか、多くの先生方が頭を悩ませているのが現状でしょう。

5回目となった奈良ASPネットワークE S D子どもキャンプでは、教員を目指す学生が、現職教員のサポートのもと、4年連続で野外活動を自主的に計画・運営することで、野外活動の指導運営スキルの獲得と苦手意識の克服、さらには、より楽しくてより内容のある野外活動にするためのアイデアを試行する場になっています。今年度は、E S D・防災教育をテーマに取り組んでくれました。防災教育は、全国どこの学校においても、児童生徒の命を守り、いざというときには学校が率先避難者となることで、地域住民の避難意識を高める重要な教育です。今回のE S D子どもキャンプは、参加してくださった児童生徒、協力してくださった現職教員の方々、そして何よりも、長い間考え、話し合い、試行錯誤し、汗を流した学生のみなさんにとって、忘れられない、有意義なキャンプになったことと思います。最後に、ご協力いただいたみなさまに感謝いたしますとともに、次年度もこのE S D子どもキャンプにご協力くださいますよう、よろしく願い申し上げます。

奈良教育大学次世代教員養成センター

E S D・教材開発領域 准教授 中澤 静男

## 第5回ESD子どもキャンプ 開催報告書

数学教育専修 学部4回生 堀口大地  
国語教育専修 学部4回生 吉門歩実  
英語教育専修 学部3回生 口脇 和  
英語教育専修 学部3回生 谷垣 徹

### 1. 目的

小・中学校の学習指導要領にもESD（持続可能な開発のための教育）の理念が反映されており、現在、ESDの推進が全国的に進められている。本キャンプは、奈良市のユネスコスクールの児童・生徒及び教員のESD体験、並びに教員と大学生・大学院生の企画立案段階からの協働によるESDの指導スキルの向上を目的に開催する。

2. 日時 平成28年8月11日（木）～12日（金）

3. 会場 奈良教育大学キャンパス及びその周辺

4. 参加者 小学生（5・6年生） 10名  
中学生 10名  
大学生・大学院生 26名  
教職員 11名 合計 57名

### 5. 日程

8月11日（木）

9時	集合
9時～10時	オリエンテーション
10時～12時	キャンパス探検
12時～13時30分	昼食・テント設営
13時30分～16時30分	テーマフィールドワーク
16時30分～19時	夕食・銭湯体験
19時～21時	キャンプファイヤー
21時	就寝

8月12日（金）

6時	起床
6時30分～9時	朝散歩・朝食
9時～12時	防災マップ作り
12時～13時30分	昼食・テント撤収
13時30分～15時	活動の振り返り
15時～16時	さよならの集い
16時	解散

## 6. 各活動の概要

本キャンプのテーマを「あす～私たちが創る未来～」と設定し、各活動の企画を行った。本キャンプのメインとなるフィールドワークの活動は、ならまちの防災をテーマにして行った。フィールドワークでは班ごとに分かれてならまちを回り、ならまち交番、ならまち格子の家、奈良町資料館にインタビューをしに行った。また、回る際に iPad を持ち防災に関するものを撮影し記録した。そして、2日目の防災マップ作りでは1日目のフィールドワークをもとに班ごとに子どもたちが主体的に行った。そのほかに、本キャンプの定番となった、大学キャンパス内の自然や遺跡に親しむキャンパスフィールドワークや奈良町での夕食・銭湯体験、そして大学キャンパスでのキャンプファイヤーなどがあった。また、本キャンプのまとめとして行う、活動の振り返りでは、参加した児童・生徒が班で作成した防災マップをもとにして発表を行った。この発表では、「災害時の交番やコンビニの役割」や「地域の人々の防災の取り組み」などの学びが発表された。そして、ESD 勉強会では、フィールドワークや防災マップ作りから学んだことを振り返り、自分たちの地域に戻った時にも防災のことを考える大切さを改めて確認した。



防災マップの一部

## 7. 成果と課題

### 成果

- 防災マップ作成の際、大学生が主体で制作したのではなく児童・生徒が主体となって制作していた。  
⇒児童・生徒が防災について能動的に学んでいた。
- キャンプ全体として、予定通りにプログラムが進行していた。 ⇒余裕を持ったプログラムが組めた。
- 事後のレポートの中に、自分が企画に関わった活動を次年度にいかに関わっていくかというポジティブな意見が多かった。 ⇒参加者から企画者としての意識が変化している。

### 課題

- 参加する児童・生徒が少ない。 ⇒より充実した広報の必要性がある。
- 大学生の参加者のうち今年度卒業する人数が3割程度である。 ⇒引継ぎを例年以上に重点的に行う。



## 第5回ESD子どもキャンプを終えて

社会科教育専修4回生 黒木 純

8月11、12日の2日間にわたり、奈良教育大学とその周辺で第5回ESD子どもキャンプが開催されました。そこで、私は昨年に引き続き、今年も学生スタッフとしてこのキャンプに参加しました。

キャンプを終えて振り返ってみると、私は大きく三つの学びを得ることができました。一つ目は時間を守るということ、二つ目はお金を管理するということ、三つ目は人とのつながりが大切だということです。

一つ目の時間を守るということですが、これまで参加した子どもキャンプを終えて振り返りをすると必ず出てくる課題でした。私自身が参加する、学生最後の子どもキャンプでということで、今回のキャンプでは絶対に5分前行動を心がけてキャンプに挑みました。今回のキャンプでは、活動班の学生リーダーや子どもたちの協力や理解があり、すべての時間に遅れることなく時間を有効に使えたことがとてもよかったです。今後も集団で活動を行うときは、5分前行動を常に意識して周りに迷惑をかけないようにしていきたいと思います。

二つ目のお金を管理することですが、今回のキャンプの中での一番の反省です。大きなトラブルにはならなかったのですが、時間があるときにおこづかい帳に書かせることができませんでした。時間を守るということで、夕食と銭湯を終え学校には一番先に帰ってきて他の班より時間もたくさんありました。しかし学生リーダーが忘れてしまい、子どもたちがお金を使った後で、金額を覚えている間に書かせることができなかったというのがとても心残りです。今後、教師になりお金を管理するということはたくさんあると思います。そのときはお金を預かるという自覚をしっかり持って管理していきます。

三つ目の人とのつながりの大切さですが、これは毎回キャンプを終えると思うことです。今回の活動班では、最年長ということもあり、班の学生にも気を遣わせてしまったこともあると思います。しかしコミュニケーションをうまく取ることができ、参加してくれた子どもたちから「来年もキャンプに参加したい」ということを言ってもらえた時に本当によかったと思いました。また、企画班では、先輩に任し過ぎていたことで準備を直前になるまであまりできていないということもあり大変でしたが、先輩や後輩と直前に一気に作り上げていくことで班の絆も深まったと思います。さまざまな活動の中で学生同士が、重要なことを確認したり相談したりしながらコミュニケーションをとるなどのつながりがしっかりとできていました。このつながりは、今後の活動にも生かしていきたいです。

今回のキャンプでたくさんの学びがあったのは、これまでになく会議や事前準備などに参加することによってできたからだと思っています。残り半年しか大学生活はありませんが、ユネスコクラブの活動で貴重な経験を積み重ねていきたいです。



ESD子どもキャンプの立て看板

## ESD子どもキャンプに参加して

数学教育専修4回生 堀口 大地

平成28年8月11日、12日の2日間を通して第5回ESD子どもキャンプが行われた。ESD子どもキャンプは、奈良市内のユネスコスクールから小中学生を集め、大学内と奈良町をフィールドに、ESDを学ぶキャンプである。今回は「あす～私たちが創る未来～」というテーマでキャンプを行った。

私はこのキャンプで感じたことや学んだことが3点ある。第1に準備の大切さである。第2にキャンプ中の雰囲気づくりについて、第3にリーダーとの情報共有である。

第1に準備の大切さである。今年のキャンプをするにあたって、5月の中旬から動き出した。1回生の時はたった2日のために3ヶ月も前から動かなくても問題ないと思っていたが、4回生になって3ヶ月も前から動く理由がわかった。キャンプにはたくさんの学生とたくさんの教員が関わる。その中で教員や学生が情報共有する時間やならまちフィールドワークの下調べをする時間を考えると長い時間かけて準備する必要があると実感した。今回、各企画の共有を図るために週1回のペースで各企画のリーダーが集まって会議をした。会議を行うことによって他の企画の進捗状況も把握でき、また最初に立てた予定通りに進んでいるかなどのアドバイスもできた。その成果もあってか当日の各企画のすれ違いがなかったと考える。また、朝食や昼食の手配や保険、裏方で動いている学生の動向表作成など子どもから見えていない部分の準備もたくさん必要であった。どれを除いてもキャンプが成立しないと考えると3ヶ月分の長い時間の予定を立てて見通しを持つことがとても重要だと思った。そして、この準備や会議は現場に出たときに特別活動で修学旅行や自然学校を行う際に活かしていきたいと思う。

第2にキャンプ中の雰囲気づくりについてである。今回のキャンプでは司会進行の役についた。2日間にわたって子どもの顔を真正面から見ることができ、たくさんの子どもの表情を見ることができた。1日目の朝は子どもたちの表情は強張っていた。この状態からどんなことをすれば雰囲気を変えられるか不安であった。しかし、大学生も子どもたちにも楽しめるような言葉をかけていったら、子どもたちの表情が変わるにつれてキャンプの雰囲気も変わっていった。また、2日目の防災マップ作成の中間で子どもたちの集中力が切れてきたところでテーマソングを歌い、休憩をいれた。そうしたら、休憩後はまた活気を取り戻し子どもたちは防災マップに集中した。テーマソングを歌うタイミングや指示を出すタイミング次第で雰囲気を大きく変えられることが分かった。

第3に活動班に入っている学生との情報共有である。司会進行の役について子どもたちと一緒にいるが、密に接しているのは活動班に入っている学生たちである。そのため、活動班のリーダーを何回も集めて、班の雰囲気や子どもの体調確認、水分補給の回数まで話し合った。そのため、各班の状況を常に把握することができた。プログラムの中に休憩を増やしたり、水分を配るタイミングを考えたりなど当日でしか判断できないことも迷うことなく判断できた。顔を突き合わせて話し合うことの大切さを再認識できた。



活動班リーダーと話し合い中

最後に、私は4回のESD子どもキャンプに参加した。1回生から比べるとたくさんのことができるようになり司会進行という役も経験できた。これは大学生活4年間の中で一番の思い出になった。このたくさんの経験や思い出を後輩に伝えて、これで終わりにするのではなく来年も円滑に進めるように引継ぎまで行って、第5回ESD子どもキャンプを終わらせたいと思う。

## 第5回ESD子どもキャンプを終えて

国語教育専修4回生 吉門 歩実

平成28年8月11日から12日にかけて、奈良教育大学で第5回ESD子どもキャンプを行った。今回は、小学5年生から中学3年生までの子どもを対象に「防災」をテーマとして、災害時に役立つものを探すフィールドワークや防災マップ作りなどの活動を行った。

今回のキャンプを通して学んだこと、感じたことを三つに分けて述べたい。一つ目に運営班の仕事について、二つ目に後輩との関わりについて、三つ目に目的を明確に持つことについてである。

一つ目に、運営班の仕事についてである。キャンプを行うにあたり、事前に準備しておかなければいけないことが多くあるということを改めて実感した。前回は運営班の一員としてチラシやしおりの作成などに携わり、運営班の大変さを感じたが、今回は前回以上に大変さや仕事の多さを痛感した。各企画の進捗状況の把握やしおりの作成、学生の参加確認と班分け、当日の物品や使用場所と学生の動きの確認など、様々なことを限られた時間の中で確実にこなさなければいけないものの、何ができていて何ができていないのか、自分がやるべきことは何なのかを即座に判断し行動することができなかった。また、当日のことを想定して、早い段階から計画性を持って行動することが十分にできていなかった。さらに、教員採用試験とキャンプの時期が重なっていたこともあり、周りの人々に大きな負担や迷惑をかけることもあった。来年、私が学生としてキャンプに参加することはないが、やるべきことを最初に確認しておくことと計画的に行動することの大切さを後輩には伝えていきたいし、私自身の今後の行動においても意識していきたい。

二つ目に、後輩との関わりについてである。企画班や活動班のリーダーは主に2、3回生であった。リーダー以外の参加学生もほとんどが後輩であったため、キャンプを終えるまで先輩としてどのように関わるべきかを考えていた。良いところや頑張っていることを見つけた際に、出来る限り本人に声掛けをすることを意識していたが、不足なく声掛けができたとは言えない。また、先輩として十分に後輩を支えることができなかった。当日までの準備の期間においても、当日の活動中であっても、もっと積極的に声掛けをして不安に思っていることや分からないことがないかを聞いたり、先輩や運営班にしてほしいことがないかを聞いたりすることができれば良かったのではないかと感じる。



キャンプ1日目、全員集合！

三つ目に、目的を明確に持つことについてである。今回のキャンプで5回目ということもあり、やることある程度定型化、マニュアル化している部分があった。そのため、一つひとつの行いの意味や目的をしっかりと見据えた上で実行に移すことができていなかった場面がある。しかし、それでは新たな学びや発見、楽しみが薄れてしまい、学生の意欲や態度、参加する子どもの充実感などにも悪い影響が出てしまうだろう。慣れてきたからこそ丁寧さを忘れないこと、その上で進歩することが重要なのだと気づかされた。そしてこのことは、キャンプにおいてだけではなくあらゆることに当てはまる。この考えは、私自身がずっと持ち続けていなければいけないし、後輩にも伝えていくべきものであると強く感じた。

今回は私にとって4回目のキャンプであったが、新たな学びの多いキャンプとなった。今回のキャンプ、そしてこれまでのキャンプやユネスコクラブの活動で得た学びを今後に生かしていきたい。それと同時に、来年もキャンプを行うであろう後輩にしっかりと繋いでいきたい。

## 学生生活最後のキャンプを終えて

英語教育専修4回生 糸 綾香

平成28年8月11～12日、第5回ESD子どもキャンプが奈良教育大学で行われた。今年度はテーマとして「あす～私たちが創る未来～」と設定し、防災教育の視点を取り入れたプログラムとなった。当日は奈良市のユネスコスクールの小中学校の児童生徒、大学生、そして応援に駆け付けてくださった小中学校の先生方と熱い2日間を過ごした。

私はこのESD子どもキャンプに関わって5年目で、そして今回が私にとって、学生生活最後のキャンプであった。そのキャンプを終えた今、印象に残っていることが3つある。第1に昨年度のキャンプと比べて感じたこと、第2に今回を通して自分がレベルアップできたこと、第3に来年度以降のキャンプについて感じたことである。

第1の昨年度のキャンプと比べて感じたことである。昨年度、私はキャンプの総括を担った。個人的には自分の決断力のなさ、周りへの気配りが足りていなかったことなどが心に残ってしまった。しかし今回は、特に当日、今までの経験をもとに、少し予想とは異なることが起きた際には周りに「こうしたら？」と提案でき、自分の担当すべき仕事と周りが担当する仕事を振り分けることができ、昨年度達成することができず後悔していたことを、今回は達成することができたと感じる。キャンプが終了した今、その達成感を十分に感じている。

第2のこのキャンプを通して自分がレベルアップできたことである。今回私は運営班に加え、オリエンテーション班に所属し、キャンプファイヤー班にもサポートに入った。そのどちらでも、ギターを弾きながらのレクリエーションゲームの進行を行った。準備段階にてオリエンテーション班で「自分のしたことがないゲームに挑戦しよう。」と話し合った。私の挑戦は、ギターを弾きながら進行もするゲーム「みんな集まれ」であった。ギターを使ったゲームは今までもしたことがあったが、伴奏に徹するのみであった。自分でギターを弾きながら、ゲームも進行するのは、とても難しく、本当のことを言うと「なぜこれを選んでしまったのか？ギターを使わない同じようなゲームに変更しようか」と後ろ向きに考えたこともあった。しかしギターの自主練習、ゲームの予行練習をすることで当日は自信を持ってゲームを行うことができた。キャンプファイヤーでも今まで以上に自信を持って、ギターを担当することができた。「ギターしかできない」から「ギターをしながら何かできる」へとレベルアップをすることができた。



オリエンテーションで



キャンプファイヤーでの一コマ

第3の来年度以降のキャンプについて感じたことである。今年度のキャンプファイヤーでは、ユネスコクラブのOBの方々の、いつまでも記憶に残る大爆笑の教員スタンスを見て、心から「こんな風に戻ってきたいな」と思った。子どもキャンプを通して、後輩は先輩に自分たちの成長を見せることができ、先輩は卒業し社会経験を積みパワーアップした姿を見せ、後輩を鼓舞することができる。卒業しても刺激を与え合える場にもなるのだと、今回強く感じた。この子どもキャンプは長い間関わり、喜怒哀楽と自分の成長が詰まった大事なキャンプである。そしてそれを支えるユネスコクラブはなくてはならない存在だと思う。後輩たちには、私たちの想いをつなげ、パワーアップしながら続けていってほしいと強く思う。

この子どもキャンプにもう学生として関わることができないと思うと悲しいが、来年度からは新たな立場での関わりができるということにワクワクもしている。後輩たちの活躍を心から楽しみにしている。

## ESD子どもキャンプを終えて

美術教育専修 修士2回生 横井 まどか

8月11日・12日に奈良教育大学のキャンパス内と奈良町で奈良ASPネットワーク主催の第5回ESD子どもキャンプが行われた。対象の子どもは奈良の小学校5年生から中学校3年生である。今年は五つの活動班が編成され、大学生リーダーと子どもたちが2日間寝食を共にした。

私が今回のキャンプで良かったと思った点が二つある。一つ目は事前準備について、二つ目は仲間同士の信頼関係についてである。

一つ目の事前準備についてである。今回のキャンプでは、各企画の事前の打ち合わせや準備が前回より多かったように感じた。昼休みや空きコマをうまく使い、テスト前の忙しい時間なども工夫し合い、企画について話し合いを進める姿が見られた。また、テスト前に忙しくなることを見越して早めに企画について協議を重ねた企画班もあったらしく、時間の使い方の工夫を随所に見ることができた。参加者がお互いに時間が限られているという意識を持ち、SNSなどの連絡手段もうまく利用しながら、時間は短くとも話し合いが進みやすいよう工夫したためではないかと思う。また、今までは前日準備に集中していた全体の打ち合わせの開催を、前日だけ



8月5日のプレの様子

だけでなくプレの開催のあとに分けたりすることで結果的に打ち合わせの参加者が増え、当日の動きをより全体で共有しやすくなっていたように思う。参加者の時間調整や情報の共有の仕方に助けられていたように感じた。

次に、二つ目の仲間との信頼関係についてである。今回の子どもキャンプでは、一部を除きタイムス



みんなで作り上げたキャンプファイヤー

ケジュール通りに進めることができた。これは今回が5回目の開催ということに加えて、それぞれの活動班のリーダーや企画、運営との情報のやり取りがうまくいったためではないかと思う。早めはやめの連絡を心がけ、わからないことは直ぐに聞くという体制が整っていたからだろう。それは、これまでの参加者同士の信頼関係が影響しているように思う。なにか困ったことがあれば仲間

に聞ける、なにか失敗しても仲間がフォローしてくれる。私もキャンプ中、困ったことや確認したいことがあれば同じ運営班の仲間やキャンパスフィールド班の仲間

に尋ねることができた。今まで培ってきた信頼関係が発揮された今回のキャンプだったと思う。今回の子どもキャンプは私にとっては最後のキャンプとなった。5回のキャンプを通し、活動班2回と運営班3回をそれぞれ経験したが、どちらもキャンプをするには欠かせない大切な役割だったと思う。表立っては見えない部分でも、たくさんの人が動き協力することで一つの企画が動いていることを身をもって体験できた5年間だった。そして、一緒に活動した仲間や先生方からたくさんのことを学び、成長できたキャンプだったと思う。ここで得たことを社会に出てからも活かしていきたい。

最後に、ここまで一緒にキャンプを作り上げてくれた仲間たちと先生方、子どもたちに感謝を。素敵な時間をありがとうございました。

## 第5回ESD子どもキャンプを終えて

英語教育専修3回生 田中 晴日

8月11日から12日に、奈良教育大学と奈良町をフィールドにした第5回ESD子どもキャンプが開催された。今年は、「防災」をテーマにしたフィールドワークや、防災マップ作りを行った。

今回のESD子どもキャンプを終えて、自分にとって大きな出来事だったと感じたことが二つある。一つ目にテーマ別フィールドワークの担当として企画を組み立てたことについて、二つ目に活動班に入ったことについてである。

一つ目は、テーマ別フィールドワークの担当として企画を組み立てたことである。自分がやりたかった「防災」というテーマに沿った、今までとは全く違うテーマ別フィールドワークをめざした。しかし、テーマ別フィールドワークを担当するのは初めてで、これまで大きな企画を持ったこともなく、何から始めていくべきなのか、いつまでたってもはっきりしなかった。分からない中で、周りにはいる多くの人に様々なアドバイスをいただいた。その中で学んだことは、周りに助けを求めることである。今回のテーマ別フィールドワークでは、多くの施設にアポイントメントを取りに行ったが、その時にも、自分が助けを求めたり働きかけたりすると、予想していた以上のものが本番で返ってきた。ならまち交番では、資料をいただき、警視の方に貴重な話をさせていただくことができた。奈良町資料館の方には、昔の防災グッズのほかに、世界遺産学習のポイントについて教えてくださった。ならまち格子の家の方には消火バケツを含め、打ち合わせの時よりもかなり詳しい町屋の工夫を教えてくださった。こういった学びが、子どもたちにとって良い活動の動機づけになったのではないかと思う。この経験から、自分の判断だけでなく周りの人に頼ったり、仕事を任せたりする大切さに気付くことができた。

二つ目に、活動班に入ったことである。活動班は子どもたちと接する、難しく、責任も重い仕事である。その中でいかに子どもたちと楽しく活動できるかは、常に考え行動していた。また昨年、活動班の班長を務めたこともあり、今回は自分がどれだけ班長をさりげなくサポートしていけるかを目標として自分に課していた。途中で一度抜けてしまったが、前回よりは少し先を見て行動できるようになっていたのではないかと思う。活動班の班長は目標として「学年や男女の壁を超えた、バリアフリーな班にしたい」を設定していた。子どもたちの中にリーダーシップのある子がいたこともあり、子どもたち同士でよくしゃべることができていたように思う。班長を立て、全体を見て行動することが、前回に比べるとできていたのではないかと思う。

以上の体験から、今回の子どもキャンプでは「周りに頼ること」「周りを見て行動すること」を学ぶことができた。自分のことで精一杯な状態から、俯瞰的に物事を見ることができるようになったということである。もちろんまだまだ不十分であるし、反省点も多くある。それらを振り返ることと同時に、もっと視野を広くしていきたい。今回子どもキャンプで学んだこれらのことは、キャンプ以外でももちろん重要なことである。様々な場面で、自分と周りをよく見ることがもっとうまくできるようにしたい。今回の子どもキャンプは、自分にとって多くの学びがあったキャンプであった。



テーマ別フィールドワークにて

## 学生として最後のESD子どもキャンプ

理科教育専修 修士2回生 後藤田 洋介

奈良市内のユネスコスクールに通う小学生と中学生、そして企画運営を行う大学生が、ESD（持続可能な開発のための教育）を学び合うキャンプとして、第5回ESD子どもキャンプが、奈良教育大学と奈良町を舞台に開催された。本年度のテーマは「あす～私たちが創る未来～」であった。また、毎年の特徴となる、テーマ別フィールドワークでは、地域の住民へのインタビューと、防災に役立つグッズやスポット探しを元にした防災マップの作成が行われた。

5回目の参加となったESD子どもキャンプの活動を三つの視点から振り返る。三つの視点は、一つ目に企画のマニュアル化について、二つ目にフィールドワークで大切にしたいこと、三つ目に活動を創るチーム作りについてである。

一つ目の企画のマニュアル化については、私が2年前に取り組んだ活動である。2年前は、3回目となるESD子どもキャンプに際して、「今後もESD子どもキャンプを続けるために、フィールドワークなどの作りこむ部分に時間をかけることが出来るよう、細かな部分をマニュアル化したい」と考え、しおりの作成や、各プログラムの情報を共有するプレ活動などについて、マニュアル化を行った。今年度のESD子どもキャンプでも、昨年度の経験を生かす形で、しおりづくりや、プレ活動が行われた。しかし、今年度のESD子どもキャンプでは、多くのプレ活動が行われていたが、何のためにプレ活動を行うのか、が欠けていたのではないかと感じた。児童や生徒に何か活動を促す際には、どういった理由で、その活動をするのかを説明する必要があると考えられるが、企画をマニュアル化したことで、プログラム情報を共有し、プログラムをさらに良いものにするため、ということが、暗黙の了解とされ、ルーティーンになっていたのではないかと感じた。2年前に企画のマニュアル化を行う際に、その理由を説明しなかったことに、今回の問題の始まりがあるのかもしれないとも考えられるが、今後もこのESD子どもキャンプを行っていくために、今回の子どもキャンプを振り返る機会には、その活動の理由や目的を暗黙の了解とせず、毎回確認を取るということを後輩たちに伝えていきたいと思う。

二つ目のフィールドワークで大切にしたいことについては、私は昨年度まで、テーマ別フィールドワークとESD勉強会というプログラムの製作を主として活動を行ってきた。今年度は、テーマ別フィールドワークを作成する立場ではあるものの、後輩たちにテーマ別フィールドワークを作ってもらいたいと考え、助言をメインに活動を行うこととした。助言といっても、私がこれまでの経験から、テーマ別フィールドワークの製作で大事だと考えていることは二つだけであった。その二つとは、「とにかく自分の足で歩いてみる」と「自分がそのフィールドワークをして、楽しいのか」ということである。この助言があったからかどうかはわからないが、今回のフィールドワークでは、奈良町資料館、ならまち交番、ならまち格子の家などで子どもたちがインタビューをすることができ、そのインタビューを元にフィールドワークをすることで、子どもたちに深い学びを提供することができたのではないだろうかと感じている。また、時間内に活動を終えることができたことも、何度も自分の足でフィールドワークをしたからであると考えられる。このESD子どもキャンプを通じて、参加した子どもたちに何か学びを持って帰ってもらえるように、まず、ESD子どもキャンプを創る学生が、率先して奈良町を歩き、自分たちがまず楽しめる活動を創っていくことが大切であるというこ



ならまち交番へのインタビューの様子

とを再認識した。

三つ目に活動を創るチーム作りについては、2年前のESD子どもキャンプの時から、私が感じていることである。テーマ別フィールドワークにしても、キャンパスフィールドワークにしても、各プログラムを作成するのは、少数の学生のグループである。しかし、その各プログラムで、子どもたちを導いていくのは、プログラムを作る学生ではなく、子どもの班につく学生である。その学生にフィールドワークでどんなことを学んでほしいのか、また、その学生からの意見を交流することで、各プログラムは洗練され、さらに良いものへとなる。そのような各プログラムを洗練できるチームを作ることができるかが、子どもキャンプを成功に導くカギになるのではないかと考える。そのようなチームを作るためには、そのチームを率いるリーダーが大切になると私は考えている。チームの人材を的確に、その人が力を発揮するところに配置し、チームを鼓舞するようなリーダーが必要である。しかしながら、リーダーが自然に発生するとは考えにくい。私は、チームがリーダーを育て、リーダーがチームづくりを試行錯誤しながら、よりよいリーダーになるのではないかと考える。次年度もESD子どもキャンプを成功させるために、チームを作り、リーダーを育て、活動を行ってほしいと私は思っている。



今年度の学生チーム

最後に、私はこれまで、5回のESD子どもキャンプ企画・運営に携わってきたが、今年度のESD子どもキャンプは、これまでの中で、抜群の完成度であったのではないかと感じている。2年前のマニュアル化に始まり、毎回異なったテーマ別フィールドワークの製作や、数々の試行錯誤を通じて、ESD子どもキャンプの骨組みがようやく完成したために、抜群の完成度になったのではないのかと私は感じている。次年度以降は、この骨組みを元に、さらに良いESD子どもキャンプを作っていてほしいと思う。私は今年度で、学生としての参加が最後になるが、次のステージとして、卒業生としての関わり方を模索したいと考えている。



参加者全員の集合写真

## 2回目の責任の重さから

特別支援教育専修2回生 板口 咲希

今回は私にとって、2回目のESD子どもキャンプであった。そして、初めて活動班の班長をしたり、初めての企画に取り組んだりしたキャンプでもあった。1回目とは違い、責任ある立場に置かれていることを痛感した。

責任ある立場であると特に感じたことを以下の三つにまとめる。一つ目は所属していた活動班の目標が達成できたこと、二つ目は個人的な目標に対する取り組みが不十分であったこと、三つ目は企画の準備が遅れたことである。

まず一つ目の所属していた活動班（3班）の目標が達成できたことについてである。事前の活動班の打ち合わせの時に、活動班での目標を設定した。それは「子どもたち同士で話せて仲良くなる」というものだ。子どもたち同士で話せるようになるということはとても難しい。人見知りの子どももいるだろうし、男女の性差というのも小学校高学年から中学生の子どもにとっては大きい壁である。これらを理解した上で、なおこの目標を設定したのは、2日間を通して「楽しかった」「また来たい」と子どもたちが思えるようになってほしいからであり、そのためには活動班内の環境によるところが大きいと考えたからだ。班の中で話し合うことができるということは、各企画に対するモチベーションが高まり、班の意識が統一され、一体感が生まれる。2日目を終えて、この班で様々な活動をして過ごしてきたのだという充実感や達成感を得ることで、「楽しかった」



3班の集合写真

「また来たい」と思えるようになると私は考えた。実際に、活動班の中では、子どもたち同士で話し合ったり接したりと積極的にコミュニケーションをとる姿を見ることができた。そして2日目に「仲良くなれてよかった。楽しかった」といった言葉や、「また来たい」といった感想を見聞きすることもできた。中には「See you again」を歌っている最中に感極まって泣く子どももいた。そういった反応から、この2日間が子どもたちの中でとても充実した内容になっていたことが確認できた。1日目、2日目を通して子どもたちのコミュニケーションが段々広がっていく様子や、最後の感想から「子どもたち同士で話せて仲良くなる」という目標が達成され、かつそれによって子どもたちの充実感などが生まれたことが分かった。私たちの取り組みの姿勢によって、子どもたちがキャンプを通して得られるものの大きさが変わってくることを知り、責任を感じた。

次に二つ目の個人的な目標に対する取り組みが不十分であったことについてである。上記に挙げた班の目標と同時に、私個人の班長としての目標を設定した。それは「子どもの様子を見ること」である。子どもの体調が悪くなった時を見逃さないように、あるいは単独行動をして交通事故にあわないように、様子を見ることを心がけようと考えた。当日は猛暑が予想されていたので、子どもの体調管理に気を付けたいと思い、この目標を設定するに至った。健康チェック時はもちろんのこと、テーマ別フィールドワークやアドベンチャータイム、朝散歩などの学外での活動時の子どもたちの様子に気を配ることを心がけようとした。しかし、実際には健康チェック時にしか子どもたちの体調の悪さを見抜けず、結果的に体調の悪化を招いた。診断は大したことがなかったにせよ、子どもの健康を把握しきれなかったこと

が最大の反省点である。さらに3班の学生の中で体調の変化に対する共有が不十分であったことも反省点に挙げられる。本来ならば健康チェックなどでわかったことを班長が運営班だけでなく班の中でも共有すべきなのに、それが十分行えていなかった。学生の中で何が起きているのか、子どもたちがどうなっているのか、という基本的な情報が欠落し、子どもたちをカバーしきれていないという大変危険な状態になっていた。SNSだけでなく直接口で伝えることの重要性もこの事態を通して学んだ。学生はそれぞれ子どもと一緒にいたり、次の企画の準備をしたりと忙しいため、携帯電話を見る余裕がない。送られてきたメッセージを見るのが遅くなるので、直接口で伝えることも考慮しなければならないと感じた。「子どもの様子を見ること」という個人的な目標を十分に行えなかったことが今回のキャンプでの最大の反省である。

最後に三つ目の企画の準備が遅れたことについてである。私は今回初めて夕食・銭湯班の企画に取り組んだ。企画班の班長が積極的にスケジュールリングをしてくれたところまでは順調だった。しかし、その日程管理が企画班の中で浸透せず、企画班の人がそれぞれやるべきことを見失うという事態が起きた。その結果、しおりの提出が締め切り間近になったり、寸劇の作成や練習が前日になってしまったりと余裕のない準備となった。これらの反省点から、早めにスケジュールリングをすること、そして企画長だけでなく気づいた人がリマインドすること、やるべきことや決めるべきことはなるべく全員が集まって考えることなど、目標をもって集合し準備に取り掛かることが大切であると分かった。



アドベンチャータイムの寸劇の様子

以上三つに示したように、目標を達成できたという良い面と不十分であった反省点がこのキャンプにあった。次回このESD子どもキャンプに参加する際は、今回の良かった点が更に発展できるように考え、反省点を活かせるような活動をしていきたい。次回はより責任が重い立場になることが予想されるため、上回生とコンタクトをとりながら下回生と円滑に企画や活動が行えるよう努力したい。



ESD子どもキャンプの全体集合写真

## 第5回ESD子どもキャンプを終えて

英語教育専修3回生 谷垣 徹

2016年8月11日、12日の2日間にわたって、第5回ESD子どもキャンプが行われた。ESD子どもキャンプは、奈良市内のユネスコスクールに通う小中学生を対象に、大学やその周辺の地域をフィールドとしてESDを体験的に学ぶキャンプである。大学内で行うキャンプは今年度で5回目を迎え、今回は「あす～私たちが創る未来～」をテーマとして開催した。このキャンプでは、本学学生、教職員、そして地域の現職教員との協働により、企画立案から当日の運営までを行っている。

私がこのキャンプを通して感じたことを今後の活動に生かすために、以下の3点について振り返りたい。第1にキャンプを通じたESDの学び、第2にそれぞれのプログラムに対する自分自身の関わり、そして第3に後輩へのキャンプの運営技術の継承についてである。

第1のキャンプを通じたESDの学びについてであるが、ここでは2日間の活動の中核となる「テーマ別フィールドワーク」と「振り返り発表会&ESD勉強会」について触れたい。今年度は防災をテーマに設定し、①防災の観点から自分自身の地域を見つめる「目」の獲得、②明日を創る担い手としての当事者意識の獲得の2つを狙いとして活動を展開した。参加者の児童生徒にとっては、奈良町でのフィールドワークを通して防災に対する工夫や取り組み、またそれらに関する問題点を発見し、その上で自らの考えを持ち、防災マップの作成を通して学びを発信することができた。企画側の学生としては、自分の足で何度も地域を歩き、ESDの教材化としての視点から地域を見つめ、学生自身も防災について学び考え、児童生徒の学びを導くことができた。また、今年度は「防災」という例年とは異なる視点からの学びを取り入れることができた。ESDは非常に幅広い分野の問題を対象として扱うことができ、その教材化には大きな可能性があると考えているので、今後も多様な分野における学びの可能性を追求していきたい。

第2のそれぞれのプログラムに対する自分自身の関わりについてであるが、私は今回のキャンプで、企画段階及び当日の進行において、あらゆるプログラムに関わった。具体的には「テーマ別フィールドワーク」「キャンプファイヤー」「朝散歩」「振り返り発表会&ESD勉強会」などである。このキャンプの企画運営に関わるのは今回が三回目であり、これだけたくさんのプログラムに携わる機会を得ることができたことに対する喜びを感じるとともに、その責任の大きさを感じた。どのプログラムも2日間の位置づけの中で重要な意味を持っており、参加者に何を感じさせたいか、学び取ってもらいたいのか、また企画側として何に注意しなければならないかをより深く考えることができ



活動班で作成した防災マップ



奈良町資料館でお話を聞く様子

た。また、その準備段階からの仲間との協働を通して、企画班内での個々の役割や学年を超えた関わりの重要性を感じた。中でも「振り返り発表会&ESD勉強会」は2日間の活動のまとめとして非常に重要な部分であり、昨年度はその重要性に対する不安から担当を先輩へお願いしたのだが、今年度はそのリベンジを果たして参加者の学びを深めることができたのではないかと考える。それは、児童生徒にとってこの2日間の活動がどのような学びにつながっているのか、児童生徒による防災マップの発表の内容と関連させ、今回のテーマ「あす～私たちが創る未来～」に込めた企画者側の思いとともに伝えることができたからである。

第3の後輩へのキャンプの運営技術の継承についてであるが、この活動は今年度で第5回を迎え、そのノウハウが脈々と受け継がれてきている。来年度は自分の学年が最高学年となり、キャンプ全体をまとめる立場となる。そのためには、まず学生自身がESDについての十分な知識を持って自らの学びを深め、キャンプ運営や企画の進行に関して後輩を巻き込んでリードしなくてはならない。今年度までは第1回からキャンプの運営に携わっている先輩方からの指導を受けて企画を作ることができていたが、来年度からはそうはいかない。来年度からは今までと違った新しい体制での運営が始まり、このESD子どもキャンプの歴史の中で大きな転換期にあると感じている。そのためにも、第1回から第5回までのそれぞれのキャンプがどのような内容で行われてきたのか、ESDの視点からどのような学びを意識していたのか、先輩方はどのような思いをもってこの企画を作り上げていたのかを後輩へ伝えていく場を設定したいと考えている。来年度の第6回ESD子どもキャンプに向けて、そのような組織全体として先輩方の経験を後輩へ伝える場を設定すること、また個人としては、この大きな転換期に関わる者として、キャンプという企画全体を創り上げるという役割の責任の大きさをきちんと認識し、同学年の仲間と次世代の企画を作っていく後輩たちと協働していきたい。

最後に、今回は自分にとって3回目の関わりとなるキャンプであったが、毎回違った立ち位置や役割でこのキャンプに携わってきた。今回のキャンプを通して得ることができた多くの学びを、今後の活動に生かしていきたい。また来年度は最高学年として、活動全体を、またそれに携わる学生全体をまとめ上げる存在にならなければならない。来年度もさらに良い活動を参加者に提供できるように、次へとつなげるための活動を行ってきたい。



キャンプの企画・運営に携わった学生たち

最後に、今回は自分にとって3回目の関わりとなるキャンプであったが、毎回違った立ち位置や役割でこのキャンプに携わってきた。今回のキャンプを通して得ることができた多くの学びを、今後の活動に生かしていきたい。また来年度は最高学年として、活動全体を、またそれに携わる学生全体をまとめ上げる存在にならなければならない。来年度もさらに良い活動を参加者に提供できるように、次へとつなげるための活動を行ってきたい。



参加者全員の集合写真

## キャンプを通して

数学教育専修3回生 杉田 岳史

今回この一泊二日のキャンプを通して、自分は多くのことを学ぶことができました。自分は、活動班にも入っており、また、運営にも関わらせてもらったことから、このキャンプを表と裏から見ることができたのではないかと思います。その中で来年に繋げていくために感じたことが三つあったので、それらを書きたいと思います。

その三つとは、一つ目に目的意識、二つ目に子どもたちの安心感、三つ目に子どもたちの力の育成に関することです。

まず、一つ目の目的意識についてですが、それぞれの企画ごとに、子どもにどんな力をつけさせたいのか、そのためにどんな声かけをするのか、どこに力を入れるのかということが定まりきっていなかったところもあったのではないかと思います。自分の班であったキャンプファイヤー班でもそうだったように思います。自分の班では、キャンプファイヤーをするだけになってしまっていて、何のためにキャンプファイヤーをするのかということが十分に考えられていなかったのではないかと思います。テーマとして「Make Us Fire～みんな燃え上がれ～」というものがあり、みんなで創り上げるキャンプファイヤーという意味が込められていたのですが、その先の「何のために」といった部分がつめきれていなかったのではないかと思います。良かったところとしては、キャンプファイヤー全体を通して、キャンプ全体のテーマである「あす～私たちが創る未来～」に沿った、みんなでキャンプファイヤーを創り上げるという意識を持つことができたので良かったと思いました。



キャンプファイヤーの風景

二つ目の子どもたちの安心感についてですが、子どもたちに安心感を与えすぎてしまった場面、逆に子どもたちに安心感を与えなさすぎた場面、両方ともあったのではないかと思います。子どもたちに安心感を与えすぎてしまった場面についてですが、主に2日目によく見られたのではないかと思います。子どもたちに考えさせて活動させる言葉かけや、子どもたちに自分たちが動かないと、考えないといけないという危機感を持たせることができている場面がいくつかあったのではないかと思います。知識は子どもに与えるべきですが、そこから知識をどのように使用するのか、知恵を絞らせるのは子どもにやらせなければいけないのではないかと思います。次に子どもに安心感を与えなさすぎた場面についてですが、主に自分のミスなのですが、運営班の仕事などで班活動から抜けることが多いということを子どもたちに伝えることを忘れてしまっていて、子どもたちを不安にさせるような事態が起きてしまいました。また、班活動などで、市街地に出るときなどに、子どもたちのことを常に見ておくことができているのではないかと思います。自分の班ではリーダーの数が多くもあり、班の子どもたちを一人が二人ほど見るだけでよかったので、班が縦に長くなってしまい、全員を見ておくということができていませんでした。リーダーの中でも班長は、一番子どもに安心感を与えることができると思うので、リーダーが子どもたちを見ておくことができるような隊形を作るようにしたほうが良いのではないかと思います。

最後に3つ目についてですが、子どもたち自身の力をどの程度育成することができていたのだろうかと思いました。2日間を通して、多くの知識、ためになることを子どもたちに伝えることができ、また、その知識を子どもたちの中に落とし込むこともできていたように感じて、すごくよかったと思いました。子どもたち自身が生きていくための力は上手に育成しきれていなかった場面もあったのではないかと思います。自分もできていない場面もあったので言えることではないのかもしれませんが、例えばリーダーシップや協調性などのコミュニケーション力や、自分から意見を言う自主性、それを相手に伝える力などですが、もっと良い働きかけなどができたのではないかと思います。子どもに班をまとめさせる工夫や、子ども自身に意見を出させたり、他の班員と協力させたりといったことができたのではないかと思います。そのために、1日目で子どもたちが、2日目はほとんどリーダーの手助けなしで班を動かしていけるように支援をすることが必要だと思いましたし、1日目、リーダーは班から少し距離を離したりして見ても良かったのではないかと思います。



キャンパスフィールドワークで話を聞く子ども

以上3点がこのキャンプを通して、もっと良くなるためにできると思ったことです。このキャンプに参加させていただいて、改めて、自分自身が目的意識を持って取り組むことの大切さや、子どもたちに対して、自分はリーダーとして何ができていて、また、他にどんなことがもっとできそうなのかということを確認することができて、とても良かったです。

## 第5回ESD子どもキャンプを通して

家庭科教育専修2回生 川道 美和佳

2016年8月10日から11日に、素晴らしいお天気のもと第5回ESD子どもキャンプが開催された。私は今回、2回目の参加であったが、企画班のリーダーや活動班のリーダー、後輩を率いての学生スタッフなど初めてチャレンジさせてもらうことが多くあった。だからただ先輩についていっただけだった去年より、不安や緊張が伴った。しかし、こうしてキャンプを全て終えた今、反省点はあるものの多くの学びを得ることができ、達成感でいっぱいである。

具体的にどのようなことを得られたかという、大きく分けて三つある。第1に目的を意識することの大切さ、第2に叱ることの難しさ、第3につながりだ。

第1の目的を意識することの大切さ。

私はキャンプの一番初めのプログラムである、オリエンテーション班の所属であった。どうやったら子ども達の緊張を解きほぐせるか、初対面同士の子どもたちにコミュニケーションが生まれるか、ということ意識しながら企画を進めていった。そうすると、去年と全く同じプログラムではなく、ゲームを中心としたプログラムにな



オリエンテーションの様子

った。また当日は、私はオリエンテーションの締めとなるゲームを担当し

た。今までも何度かゲームをさせてもらったが、とにかく言葉も一言一句を決めてそれに沿ってやっていた。しかし先輩の助言もあり、今回は流れだけを決めてやることにした。そうすると、今まで自分に精一杯だったのがなんとなく全体を見渡しながらでき、まわりを盛り上げ、オリエンテーションを締めくくるという目的を意識しながらこと進めることが出来た。形ではなく目的を意識することが大切というのは、オリエンテーションに限らず他のどのプログラムにおいても同様のことが言えるだろう。来年はこのキャンプも第6回を迎え、私自身にとっても3回目のキャンプとなる。回を重ねるごとにどうしても形だけ則ってやってしまいがちかもしれないが、常に目的を意識しながら企画し、当日も行動するようにしたい。

第2に叱ることの難しさだ。私は1班で班長をさせてもらった。その時の詳しい状況は割愛するが、ふざけていて行動が遅かった男の子たちを叱ることができなかったことを未だ後悔している。そのことで、男の子ときちんとした女の子の間に溝ができてしまったようにも思うからだ。それがモヤモヤしたまま2日間を終えてしまった。もちろんそれは私の中の話であり、子どもたちがどのように感じていたのかは分からないし、もうとっくに忘れ去っているかもしれない。しかし、子どもと接する際、優しさだけでなく叱るべき時にそれが出来る人でありたいと私は思った。

第3のつながり。私はこのキャンプを中で、多くの方にお世話になった。先輩方はこのキャンプで私に多くのチャンスを与えてくれた上で、私が行き詰まっていたら手を貸してくれ、相談に乗って下さったり、アドバイスを下さった。先輩方がいたからこそ、私はこのキャンプで色んなことに挑戦できたのだと思う。そして同回生。人数が少なくて少し寂しいが、みんな個性豊かな面白いメンバーで、見ていると自分も頑張らないと思わせてくれる仲間だ。後輩



1班のみんな。警察署で貴重なお話が聞けました！

は、このキャンプで初めて関わる人が多かったが、班活動や学生スタントなどを通して私が言ったこと以上のことをやってくれ、逆に助けてもらうことも多くあった。初めての参加なのにキャンプを盛り上げていて、大変刺激を受けた。もちろん、お世話になったのはユネスコクラブのメンバーだけではない。大学の先生方、現職の先生方、地域の方々など、多くの方の支えがあったからこそ、このキャンプを無事終えることが出来た。これらのつながりに感謝しつつ、今後も大事にしていきたいと思う。

最後に、こうして改めて振り返ると前回のキャンプに比べ、多くのことを学べ、多くのことが見えてきたように思う。とはいえきっと、運営の方達がいかに動いてくれていたかなど、まだまだ私には見えてない部分、学ぶべき部分がいっぱいあるだろう。来年のキャンプでは、今回のキャンプで得たことを活かしつつ、さらに新しいことを得られるようにしたい。

## 第5回ESD子どもキャンプに参加して

英語教育専修3回生 辻野 光歩

8月11日、12日の2日間にわたって、奈良教育大学で第5回ESD子どもキャンプが行われた。今回は「あす～私たちが創る未来～」をテーマに設定した。

私が今回のキャンプに参加して学んだことは三つある。一つ目に班に馴染めていない子への関わり方について、二つ目に子どもたちに達成感を与えることについて、三つ目に、人に伝えることの重要性についてである。

一つ目は、班に馴染めていない子への関わり方についてである。今回のキャンプでは、活動班のリーダーをした。班の中に、おとなしく自分からはあまり話せない男の子がいた。去年のキャンプでも活動班に参加したが、あまり周りを見渡せていなかったように思う。今回は班全体の様子を見るように心掛けた。あまり馴染めていない男の子に対しては、積極的に話しかけるようにした。最初は緊張してあまり話してくれなかったが、2日目には口数が多くなっているように感じた。

二つ目は、子どもたち自身の手で何かを作りあげる達成感を感じさせることが大切であるということである。このキャンプのメインであった防災マップ作りでは、班の大学生はあまり手助けしないようにすることを心掛けた。ほとんど手助けなしで子どもたちの力で一つの防災マップが出来上がった。これから中学、高校にあがるにつれて教師の手助けなしで様々なことを自己解決することが求められるため、自己解決の機会を作ることが子どもたちにとって必要であると感じた。

三つ目は、人に伝えることの重要性である。防災マップを作るために奈良町を歩いたが、防災マップを作るという目的だけではなく、そのマップを使って発表することで、自分の学びを整理することができる。また、学びを発信することで、学びが連鎖し、持続可能な社会づくりにつながると考える。ESDは環境だけでなく、学びを発信し、その学びを持続可能な社会づくりに生かしていく学習なのではないかと、今回のキャンプで感じた。

留学1週間前のキャンプだったので参加するか迷ったが、様々な学びがあったので参加してよかったと思う。



オリエンテーションでの円陣

## 第5回ESD子どもキャンプでの学び

英語教育専修3回生 森本 珠美怜

8月11日12日、奈良教育大学にて第5回ESD子どもキャンプが行われた。今回は企画班のリーダーを務め、これまでとは違う新たな学びを得ることができた。

さて、今回の子どもキャンプを通して気づいたこと、学んだことが三つある。第1に企画班の運営について、第2に活動班でのかかわり方、第3にこれからにつなげていくことである。

第1の企画班の運営については、今回初めてキャンプファイヤー班のリーダーを務めたこともあり、どのように進めればいいのかわからないことが多かった。しかし、先輩方からのアドバイスのおかげで当日まで進めることができた。当日までの準備の中で、計画を立てて進めることの大切さを学んだ。今回のキャンプは昨年よりも日が早かったため、期末試験後からの準備期間が少なかったが、キャンプファイヤーの流れを決めたり練習をしたりと、当日までの流れを考えながら進めることができた。キャンプファイヤー班では、わたしがリーダーであったのにもかかわらず、キャンプファイヤーを多く経験してきている他のメンバーに頼りすぎてしまった。今回の子どもキャンプで少し自信をつけることができたので、これからはより積極的に取り組んでいきたい。

第2に、活動班でのかかわり方である。今回はキャンプが始まる前に、ESDの観点で気づきを与えるという目標を立てた。誘導するような言葉かけにはならないよう注意し、フィールドワークの中でも発問を行い、子どもたち自身に考えてもらうようにした。これまでも、この目標を掲げていたが、最後の成果発表の中で、今回はこれまでで最も自分の班の子どもたちに学びを与えられたキャンプであったと感ずることができた。一方、活動班での反省点は、子どもたちに手を貸しすぎたことである。今年も時間の厳しい予定だったので、急がせることばかり考えてしまっていた。そのため、荷物が重いといえど持ってあげてしまっていた。子どもたちの自立性を育てるためにも、自分のことはきちんと自分でさせなければならないと感じた。

第3にこれからにつなげていくことについてである。ESD子どもキャンプも今回で5回目となった。今回のキャンプで初めてテーマソングを考え、ギターを弾いた。わたしは初めからギターが弾けたわけではなく、このキャンプのために練習を重ねてきた。このように、それぞれのスタッフが持つスキルがあると思う。先輩方はいずれ卒業してしまう。それまでにスキルの継承が必要不可欠であると思う。今回のキャンプの準備期間では、わたしの他に二人とギターの練習を行っていた。そのうち一人は、今回のキャンプではギターを弾く機会はなかったが、今後のために練習を続けていた。ギター以外にも、スキルの継承が今後の課題になっているのではないかと考える。

自分にとって3回目のキャンプで学んだ以上3点を第6回ESD子どもキャンプにつなげ、次回はより中心となって企画や運営を進めていきたい。



成果発表のようす

## 第5回ESD子どもキャンプに参加して

英語教育専修3回生 口脇 和

2016年8月11・12日に、第5回ESD子どもキャンプが奈良教育大学にて行われた。「あす～私たちが創る未来～」をテーマに、奈良市の小中学校に通う子どもたちと一泊二日を一緒に過ごした。防災をテーマに奈良町でフィールドワークをしたり、大学内でキャンプファイヤーをしたり、様々な企画が行われた。

ESD子どもキャンプには1回生の時から参加しており、今年で3年目となった。昨年までは活動班に入って2日間を過ごしたが、今年は運営する側で2日間を過ごした。そのため、今年のキャンプは昨年までとは大きく異なり、新たな気持ちで2日間を過ごすことができた。今回のキャンプを通して、行事を運営する際に必要なことを二つ学んだ。一つ目は先のことを考えて行動すること、二つ目は細かく報告をすることである。

学んだことの一つ目は、先のことを考えて行動することである。活動班に入っていた昨年までは、子どもの様子を見ながら必死の一つひとつの企画をこなしていた。しかし、運営班に入った今年は、その時行われている企画の次のことを考えながら行動しなければならなかった。運営班に入ったのは初めてだったので、何をしていたかわからず立っていることが多かった。先輩方に「次の企画の物品は大丈夫？準備できてる？」と声をかけていただいて、キャンプ中は行動していた。先輩方の声かけのおかげで次の企画のことを考えながら行動することができたので、来年は先輩に頼りきるのではなく自分で考えながら行動できるようになりたい。

二つ目は、細かく報告をすることである。キャンプファイヤーの最中に火の粉に当たってしまった子どもがいたのだが、私はその子を看護師の方に受け渡してそのままキャンプファイヤーの担当学生に報告するのを忘れていた。特に問題はないと思っていたが、そのことがキャンプファイヤーのスタンプに少し影響を与えてしまった。キャンプファイヤーの担当学生に迷惑をかけてしまったので、細かく報告することは大切だと感じた。

昨年までのキャンプでは活動班に入って子どもと2日間を過ごしたため子どもと関わる機会もたくさんあったが、今年は昨年までほど子どもと関わることはできなかった。しかし、運営班として企画をサポートしていく中で子どもと関われるチャンスは何度もあったし、行事を運営する上で大切な、先を考えて行動することと細かく報告をすることを学ぶことができた。私にとって3回目のESD子どもキャンプは、これまでで最も学びの多いキャンプになった。



キャンプファイヤーの様子

## 第5回ESD子どもキャンプを振り返って

心理学専修1回生 谷村 和佳奈

子どもキャンプはたくさんの方を学ぶことができる活動である。子どもたちだけでなく、学生も多くを学ぶことができるものである。

わたしは、今回初めてESD子どもキャンプに参加して、今までとは違う立場に立って活動していくという経験することができた。指導、指示される立場からする立場に変わる初めての機会であった。そのとき感じたことや考えたことを三つ述べる。一つ目にオリエンテーションについて、二つ目にフィールドワークについて、三つ目にキャンプファイヤーについてである。



全体写真

一つ目のオリエンテーションについてだが、同じ班で2日間を過ごすうえで、初めが肝心である。自分が緊張するのを隠して笑顔で話しかけるように心掛けた。どの企画やゲームも学生が先頭をきって楽しまないと子どもたちは楽しめないということを意識しながら活動していくようにした。ゲームでは自然と距離が近くなるようなものや楽しみながら自己紹介ができるものばかりで工夫されているのだと思った。オリエンテーションが終わったときには少し子どもたちの緊張がとけているようだった。

二つ目のフィールドワークについてだが、私は、この企画の一員として参加させてもらった。何度も何度も集まり、話し合いをして

良いものを作るにはどのようにしたらいいのかを考えていらっしゃる上回生を近くで見て、本当にすごいという言葉しか思い浮かばなかった。また、本番では子どもたちの発見のすごさに驚いた。プレフィールドワークのときに、学生が気づかなかったものに子どもたちは気づいて、考えることができていた。

三つ目のキャンプファイヤーについてだが、キャンプファイヤーでは同じ班以外の子どもたちと話す機会が多くあった。大きな声で歌ったり、手をつないだり、体を合わせたりなど普段あまりしないことがたくさんあって新鮮だった。学生スタンプではみんなにわかってもらえるように、大きな声で、ゆっくりと話したり、動きを大きくしたりしなければならぬと頭ではわかっているけど、実際にするとできなかった。劇の難しさを感じた。

子どもたちに楽しんでもらおうと考えるなら、まず自分が楽しまなければならないということを一番この活動で学んだと思う。初めてのことで不安もあったが、たくさんの上回生の方からアドバイスをもらって活動することができた。来年はもっと積極的に参加していきたいと思う。

## 第5回ESD子どもキャンプを振り返って

数学教育専修1回生 宇都宮 怜奈

8月11日、12日の2日間、多くの方々のご協力のもとで、奈良教育大学主催のESD子どもキャンプが開催されました。私は活動班のスタッフと朝散歩班として参加し、またキャンプファイヤーでの学生スタンツ、トーチトワリング、アンクロン演奏を担当しました。時間をかけて先輩方から教わりながら打ち合わせや練習をし、なんとか大きなミスもなくやりきることができました。

さて、私はこのキャンプに参加するのは初めてで、キャンプの実際の流れ、先輩方が作り出す雰囲気など、教育学部の1回生として見て覚えておくべきものはたくさんあったように思います。この機会に、このキャンプで考えたESDのEの部分である「教育」において必要であるが、でも今の自分にはできなかった事柄を三つまとめて振り返りたいと思います。一つ目はみんなとまんべんなく話すこと、二つ目はみんなに役割を割り振ること、三つ目は女優になることです。

まず、みんなと話し、みんなから話を引き出すことが必要だったように思いました。まず相手を知ると同時に自分を知ってもらうことも必要ですし、班のメンバーが打ち解けるまでは、スタッフが会話を回していたようでした。また、子どもに全てさせるのではなく、テーマに沿って子どもをある程度誘導していくのも大事ですが、そのためには話すことが必要だと思いました。

次に、役割を振ることで自分は必要なのだという意識と、その仕事をこなせた時の達成感をそれぞれに与えることができます。それらはやる気の源となり、次の行動、そのまた次の行動に繋がると思います。

最後に、自分の態度を振り返ってみて、子どもたちに見られていること、真似されていることを意識して、出来る限り恥ずかしくない振る舞いをするべきだと思いました。また、自分が思ったことや感情をそのまま出すのではなく、班が上手く回るように発言もきちんと場に合うものを選んで口に出すように心がけるのが正しいあり方なのだろうとも感じました。

キャンプを通し、自分はこれまでの立場とは違い、引っ張っていく側なのだという意識がはっきりしてきたように思います。次に子どもと関わる機会には、以上の3点を意識し、より子どもたちと上手に距離感を保っていけるような大学生でありたいです。



銭湯後、打ち解けた空気での夕食

## ESD子どもキャンプに参加して

英語教育専修2回生 野瀬 佳吾

今年度のESD子どもキャンプは、8月11、12日の2日間にわたって開催されました。このキャンプに参加するにあたり、私はキャンパスフィールドワーク班のリーダーをさせていただきました。また、活動班の5班の学生メンバーとしても、このキャンプに携わりました。

私はキャンパスフィールドワーク班のリーダー、活動班の学生メンバーとしてのそれぞれの自分を振り返りたいと思います。

キャンプ1日目の午前、奈良教育大学の敷地内で行われたキャンパスフィールドワークでは、歴史ある奈良教育大学で密かに伝わっている七不思議を題材にした、スタンプラリー形式のようなアクティビティを実施しました。最初に、ルール説明を交えた寸劇を披露し、その後で、班ごとに七不思議と関係が深いチェックポイントを巡ってもらい、それぞれの場所で写真を撮ってもらう、というものです。今年度のESD子どもキャンプの大きなテーマとなっていた、防災の観点からのアプローチとしては、チェックポイントに行く道中にある、災害時には無料で飲料を提供する自動販売機を紹介する、という方法をとりました。結果から言うと、キャンパスフィールドワークは成功に終わったと私は思います。企画の狙い通りに、アクティビティを通して各班の仲が深まったと感じることができましたし、災害時には無料で飲料を提供する自動販売機を紹介することにより、防災マップを作るためのフィールドワークに向けての意識付けもできたのではないかと思います。

活動班では5班のメンバーとしてキャンプに臨みました。昨年度のキャンプとは違って後輩がいるということで、先輩に引っ張ってもらってばかりではいけない、自分も引っ張る側でないといけないという意識をもって臨みました。昨年度は男子の参加者とばかり会話してしまったという反省点がありましたが、今回のキャンプでは男女分け隔てなく会話することができました。それだけでなく、参加者にも男女分け隔てなく会話してもらおうとも、自分なりに努力しました。しかし、この年代の子どもたち、特に男子にとっては恥ずかしいことなのか、初日はなかなか思うようにいきませんでした。初日の夜は、次の日はこうして仲良く会話してもらおう、などと真剣に方法を考えました。しかし、いざ2日目をむかえ、その中のグループワークでは女子の参加者からの積極的な姿勢もあつてか、自分が何か行動を起こすまでもなく、初日に比べてグループの雰囲気はよくなっていたように思えました。こういったことをふまえて、次回の子どもキャンプでは初日からグループの雰囲気をよくできるように、男子の参加者と女子の参加者と、男女分け隔てなく会話できるように自分から積極的にはたらきかけることを心掛けたいと思います。



キャンパスフィールドワークにて

最後に、今回の子どもキャンプでは、昨年度の参加を経て2回目の参加であるということ、自分が最下回生ではないから後輩を引っ張っていく必要があるということを念頭において、昨年よりも充実したよい経験にしようと思って臨みました。しかし、キャンパスフィールドワーク班の活動においては、上回生の指示をあおってばかりで、むしろ足を引っ張ってしまったといえるほど、上回生に頼り切りになってしまいました。2回生としてもっとしっかりするとは考えていたものの、思っているだけで行動に表れていませんでした。次回の子どもキャンプでは、自分は他人を引っ張っていくべき立場であるということをもっと自覚して、何がどうだったとかではなく、自分の行動のすべての質を上げていきたいと思っています。

## ESD子どもキャンプを終えて

社会科教育専修1回生 高田 理生

今回は初めての子どもキャンプということもあり、キャンプファイヤーでのゲーム担当やスタンツ、活動班での男子達の見張りと、本当に手に負えるのだろうかと不安を感じながらの一泊二日のキャンプでした。そんな2日間を少し振り返りたいと思うしだいです。

本レポートでは、活動班、キャンプファイヤー、FW班から見た今回のキャンプについて記述していきます。

まずは、活動班の視点から振り返りたいと思います。3回生二人、3回生一人と三人の先輩がいるということから先輩任せにし、ややわれ関せずという感じでキャンプにのぞもうとしていたのですが、3回生のお二人はFW班の班長、キャンプファイヤーの準備などで忙しく、1回生とは言えど責任と緊張感のある初日のプログラムとなりました。また私の属した1班は男子三人と多くなかなか落ち着きのない子ということもあり、夜はなかなか寝付いてくれず上回生の方々が何人か注意しにきてもなかなか落ち着かず、苦勞させられました。意外と小学5年生から中学1年生というのは幼く、人の言っていることを聞いていないものなのだなと学びました。

続いてはキャンプファイヤーを振り返っていきます。ユネスコクラブ恒例として1回生がスタンツをしなくてはならず、人手が足りないことから1回生ながらゲーム担当となった非常に多忙なキャンプファイヤーとなりました。なかなか練習にも参加できず、未熟な完成度のまま本番に望むことになり、どうしようと不安要素だらけでしたが、多くの方から良かったよとお声かけいただき、今後への大きな励みになりました。またスタンツでの演じたキャラクター「ファイヤーブルー」も参加児童たちにはすこぶる評価が高かったようで、2日目には「もう一回やって」などの声も多かったことは、なかなか良いものを届けられたのかなと安心するばかりでした。

FW班としての活動も思い返していきたいと思います。今回は主な私のこの班での活動は「先輩方の行動を観察する」というものであったと考えられます。まだまだ勝手がわからず、来年に向け、どのようなことをなさっているのか見落としている部分も多い事でしょうが、少しは生かせるものを得られたのではないのでしょうか。

何度も上記でも触れましたが、「1回生」「初めての子どもキャンプ」であり、不安要素、未熟さを多く抱えた中での、一泊二日。参加児童にも負けないくらいのたくさんの経験、学びが私にもあったように思えます。来年のキャンプのテーマについてなのですが、少し思い浮かんでいるものがあります。今回のことを生かす形で次回は参加していきたいです。



全体集合写真

## ESD子どもキャンプから学んだこと

国語教育専修1回生 丸本 まりな

私は、今回初めてESD子どもキャンプに参加した。企画班では、主に私はフィールドワーク班に参加していた。また、キャンプファイヤーのゲームやスタンプの練習をした。キャンプファイヤーで、前に出てゲームをしたり、スタンプをしたりしたことはなかったのでうまくできるか心配だったが、先輩にアドバイスをいただきながら練習していくうちに自信がつき、自分自身も楽しみながらできるようになった。

さて、子どもキャンプの中で、小中学生の子どもたちと共に過ごして、私は、子どもたちの小さな発言や行動に目を向けて積極的に関わることの大切さを学んだ。

私がいた5班は、小学校高学年の男の子二人と、中学生の女の子が二人だった。男の子二人は最初大人しいタイプかと思っていたら、片方の男の子は緊張がほぐれるとよく話すようになった。もう一人の男の子はあまり変わらず、ずっと大人しかった。そんなに話すのが好きでないのかもしれないと思って、うまく話しかけることができなかった。

マップ作りと発表の練習の時に、子どもたちの性格や個性が強く表れていた。この時には女の子と男の子も仲良くなっていて、協力しながら作業に取り組んでいた。作業中に、先輩のリーダーが、字のきれいさやマップの出来具合などを褒めるなど、ちょっとしたことに目を向けて、相槌などを頻りに打っていた。私ももっと、子どもたちの良いところを見つけて褒める姿勢をとるべきだったと思う。印象的だったのは、マップ作りや発表の練習の時に、大人しかった男の子がしっかり自分の意見を持っていて、自分の考えをしっかりと述べていたことである。思ったことをすぐ口に出すのではなく、考えながら話していることに気付いた。

最後に班のみんなで寄せ書きをした時に、男の子二人から書いてもらった内容を見て、私に対して話しにくい印象を持っていたことが分かった。ためらわずにもっと積極的に話しかければよかったと思う。また、話しかけて子どもたちの話を聞くだけでなく、自分のことも話をするべきだったと思った。そうすることで、親近感を持ってもらい、話しやすい雰囲気を作れたのかもしれないと思う。

今回のキャンプでは、反省点が非常に多かったが、一方でキャンプファイヤーでのスタンプやゲームは自分なりに上手くできたと思う。反省点は改善して、今回学んだことを、来年の子どもキャンプに生かしていきたい。



キャンパスフィールドワークにて

## 4度目のESD子どもキャンプを経て

英語教育専修4回生 北側 瑞歩

今年の第5回ESD子どもキャンプは学部生最高学年としての参加であった。私は、企画段階ではオリエンテーション班と夕食・銭湯班として、当日は運営班としてキャンプに携わった。去年はフィールドワークの企画のみ、一昨年はフィールドワークと当日の運営班としての参加であったため、初めてのオリエンテーション班と1回生のキャンプ以来の夕食・銭湯班との掛け持ちで、不安なところも多かったが、私の中では成功という結果になったと思う。

私がこのキャンプを通して得た印象的な経験は、初めてオリエンテーションの企画に入ってキャンプでゲームをしたこと、夕食・銭湯班で協力し合える雰囲気を作れたこと、去年よりも当日の運営に関わったことである。

まず、私はキャンプで人前に立って話したり、ゲームをしたりした経験がなかった。今年はオリエンテーション班で初めてゲームをすることになったので、先輩に見てもらったり後輩からも教えてもらったり、アドバイスをもらったりしてやることができた。ほんの数分のゲームだったが、もう少しポジティブな掛け声を入れることができたのではないかなど反省するところが多くあり、また他のところでもゲームに挑戦する機会を作っていこうと思った。

次に、夕食・銭湯班では、メンバーの都合が合わないことが多く、顔合わせや作業について一緒に集まれることが少なかったが、それぞれの作業を割り振って、効率よく動くことができたと思う。作業の分配に関しても、それぞれの都合を考慮した上でできる分の負担となるようにでき、自主的に取り組んでくれる後輩もいたので、それぞれが成長できる企画であったと感じた。

次に、当日の運営についてである。一昨年のキャンプで当日の運営を担当したことがあるが、一昨年に比べて人数が少ない運営班で、当日の任される仕事量が多かったと思う。例年通り運営の仕事割り振りやタイムスケジュールを配られて動いていたが、今年のキャンプはスムーズに動けたのではないかなと思う。それは、今回で3度目であるため、慣れてきたというのもあるが、前日までのテント実習への参加や前日打ち合わせでしっかり把握できたり、動きを思い出せたりできたからだと思う。当日だけの運営であったが、前日までにやれることをやって、自分



テーマ発表のようす

の動きを確認すれば、当日に指示待ち状態にならずに自分から先のことを考えて動くことができることに気づいた。ただ、私は来年のキャンプのことを考えるともう少し前日までの運営の準備に関わるべきだったのではないかと反省している。先輩が抜けるとどうやっていたのかが分からなくなるのは、持続的ではないと思ったからである。

最後に、来年も学部生最高学年として参加予定であるが、ユネスコ活動を通して、今年よりできることを増やして最後のキャンプに挑みたいと思う。

## 子どもキャンプで見つけた私の「あす」

文化遺産教育専修4回生 佐野 宏一郎

8月11、12日に第5回E S D子どもキャンプが行われた。今回のテーマは「あす～私たちが創る未来～」であった。3回目の参加となった本年度のキャンプでは、活動班の3班とキャンパス探検の運営班として携わった。このキャンプを通じて、二つのことを学んだ。第1に「気づき」の大切さ、第2に楽しんで学ぶことである。

第1の「気づき」の大切さであるが、これは活動班の中で学んだことである。今回の校外フィールドワークは、防災マップの作成のために奈良町を歩いた。しかし、活動を通して、体調不良者が2名もでってしまった。大事にならなかったことは幸いであったが、そのような変化に気づくことができなかったのは学生側に問題がある。振り返ってみると、炎天下でのフィールドワークであったにもかかわらず、体調を気づかう声掛けが、私自身ほとんどできていなかったし、休憩の数も少なかったかもしれない。大学生の体力で考えるのではなく、いかに小中学生の立場で物事を考えられるかが、「気づく」ことに重要なのだと痛感した。また、保護者の方々は私たちに2日間子どもたちを預けているのである。それは、私たちに2日間子どもたちを預かるという責任があることでもある。その責任を果たすためにもさらなる気配りが必要であった。なによりも、子供たちに、班での行動を共にすることができない悲しさを感じさせてしまったことが一番悲しかった。体調を診てもらい、すぐに班活動に戻ることができたとはいえ、楽しい瞬間を少しでも体験できなかったことは、子どもにとって苦痛なことである。全員がベストで参加できる気配りが、子どもたちの体調面でのケアに必要である。

第2に楽しんで学ぶことであるが、これはユネスコクラブの原点でもある。教員を目指す者同士が、大学生ならではの感性で、E S Dを学ぶことができるのは今しかない。また、それが子どもたちと共に行えるのは、このキャンプしかない。今回のキャンプでも子どもたちの楽しいという言葉をよく聞くことができ、子どもたちが自ら進んで発見した場面もあった。大学生間でも、準備の段階から、楽しさを忘れずに、それでいて真剣に取り組めたキャンプであった。このキャンプを通して、一回りも二回りも成長できた人が、たくさん自分の目に映った。何よりも、自分が楽しく2日間を楽しみながら、E S Dを見つめることができた。たくさんの笑顔から、学ぶ喜びの原点を再確認できたことが一番の学びだった。



楽しく学び、発見

今回のキャンプは自分に足りない点や、E S Dの原点を見つめることができた。私は教員志望ではないため、今回の子どもキャンプが人生最後の子どもキャンプであるだろう。しかし、E S Dの追及は終わった訳ではない。E S Dに取り組むことは学生や教員だけの分野ではない。持続可能な社会づくりでは、より多くの人々が共有し、取り組んでいくことが重要視されている。そのために、生涯教育の場で、さらには社会の末端である家庭という場で、E S Dが認知され、取り組まれていくことが実現への道だと考える。権力だけでは世界を動かすことは出来ない。小さな行動化が大きな環となっはじめて世界が動くのである。そんな社会を目指すために、社会の一部として自分に何が出来るかを考え、行動することが、これからの鍵となる。子どもキャンプは、教員を目指す者だけの活動ではない。そのように気づけたことも、活動を通じて手に入れた私の財産である。3年間学んだことを糧に、社会人としての「あす」に繋げていきたい。

平成 28 年度 奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた  
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

奈良ASPネットワーク 第5回ESD子どもキャンプ報告書

平成 29 年 3 月

国立大学法人奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町

次世代教員養成センター ESD・教材開発領域

TEL・FAX 0742-27-9177

